

クレオパトラの夢

松村 裕子

明け方から降り出した雨が雨足を強めている。

以前なら、こんな雨の日曜の朝はゆっくりと、寢床でそんな気配を楽しみながら浅い眠りの中にいた。

それが今では、雨の日曜でも構わず早く起きている。それはたとえ雨や嵐でも日曜の朝の散歩を止める訳にはいかない、大切な理由が自分にはあるからだ。

雨の度に言う言い訳の言葉と妻、洋子の疑わしそうな目を思い浮かべ、言い訳の言葉を探しながらトイレと風呂の掃除を何時もより丁寧に済ませた。

そもそも休日に散歩に行くように勧めたのは洋子の方だった。体に良いという他に休日の午前中に家事を早く終わらせ、午後の時間をゆっくり休むためには、亭主が居ないほうが家事をスムーズに進める事が出来る。そのことが一番の理由だと思っている。

共働きの洋子のことを思えば散歩へ出かけることが、妻への協力だと思えたのである。

台所から八時に始まるテレビ番組の音楽が聞こえた。

「ママ、行ってくるよ」

「えー、うそでしょう。こんな雨になにも行くことないわよ。家にいたら？ コーヒーでも淹れるわ」

「ああ、いいよ、途中喫茶店で飲むから。けっこう散歩仲間ができてさ、途中でお茶飲んだり、喋ったりしてさ、楽しいよ。心配しなくていいから」

「ふーん、そう、何だか怪しいな、こんな雨に散歩だなんて」

「本当、疑り深いよなあ、洋子は」

「そうかしら？ まっ、いつてらっしゃい。それからねえ、用事早く済ますからどこかへ出かけない？」

「子供は？」

「うん、もう起こすけど、2人共部活へ行くから放っていても大丈夫よ。」

「そうか。まあ早く帰って来るからさ、その間に早く用事済ませておけよ」

「DVDでも借りるか。」

「了解。ついでに何か美味しいものでも買いましょうか」

・洋子の真っ直ぐな視線がまぶしい。

少し後ろめたい気持ちを払いのけながら明るく答えた。

「じゃ、行ってくるよ」

何気ない顔をして玄関へとゆっくり歩いた。コマースナルなのかテレビから歌が聞こえてきた。

「夢でもし会えたら 素敵なことねえ」そんなフレーズに「同感だ」と心の中で答えた。

確かに、その通り。 夢でも、もし会えたらどんなに楽しいだろう。

玄関のドアを閉めながら自分の名前が書かれたプレートを見た。

前田淳一 平凡な名と平凡な人生、一生をつつがなく終えることに生涯を賭けている男。幸せな人生だと思っていた。いや思うようにしていた。その方が楽だから。

急かされる毎日と疲れきった夕べ、景色まで色あせていくように感じていた。

そんな日々の中にまさか日曜日の散歩が薔薇色の紅を挿そうとは思ってもいなかった。

平日の朝混み合うエレベーターも今はスムーズに上昇してくる。

「ふうー」

七階のドアが開き誰もいないボックスの中で淳一は深い溜め息を落とした。

仕事からも家庭からも解放された男の溜め息だった。

とたんに体中を新鮮な感覚が走り抜けた。

静かなエントランスから外に出ると、思ったよりは柔らかな雨が舗道のプラタナスの梢を揺らしている。

高台にあるこのマンションから坂道を大ぶりの傘を差して下り始めた。

対向して来る白いワゴン車がすれ違いざまに飛ばした飛沫を危うくかわして、チラリと見ると、さくらベーカーリーと書かれたロゴマークが見えた。

たぶん「静」に配達に来たのだろう。そう思えばさして腹も立たない。自分でも現金なものだなと思いつながら一人微笑った。

春には珍しく遠くで雷鳴の音がした、

「空が少し明るくなってきたようだな」

そう思いながら淳一はゆるやかな坂道を右に回り、見事な薔薇の生垣を眺めた。

静のために少し手折りたい気もしたが他の客の手前我慢することにした。

坂を降りきった所にその店「静」はある。

ドアを開けると炒りたての珈琲の香が流れ出した。そしてやわらかなジャズの音に体中の五感がいっせいに大きく伸びをする様に感じた。

「おはようございます」

女店主である静が明るく美しい笑顔で迎えてくれた。

「雨の中、皆勤賞ものですか」

これも又、皆勤賞ものの柴田と言う初老の男がニヤニヤしながら淳一に話しかけてきた。

「ハハ、まあ柴田さんには胃を脱ぎますがね。」

さすがに今日は客の数は少ない。

「休みにここへ来るのが楽しみで一週間働いている様なものですよ」

カウンター席に腰掛けながら隣席の柴田に話しかける。

「今日来られない親父たち残念だろうな」

「いやアー、雨でも上がると来ると思うがね、賭けるかい？」

笑いながら静を見ると静の目線と合った、ドキリとしたがそのまま視線を外せずに見惚れてしまった。

静の方がうつむいてしまった。

「いつも綺麗だけど、今日は一段と綺麗だねえ。恋人でもできたの？」

そう言いながら淳一の胸がチクリと痛んだ。

「いいえ、残念ですけどね、ここに来て下さる様な男の人に出会える迄、待つことにしています」

店内の男達全員が喜びの歓声を上げた。ファンクラブでも出来そうじゃないか、そう思い淳一は満足した。

「静ちゃん、僕、年は少々喰っていますね、この中で唯一のシングルだよ。何時

でも立候補します。」

柴田が手を上げた。

「静ちゃん、よく考えようね、相手は選ばんといかんよ」

他の客が応酬する。

静がチラリと淳一を見た。淳一の胸が一瞬激しく揺れた。静がモーニングセットを運んで来た。そして

「前田さん、あさってお誕生日でしょう？ささやかなプレゼントです」
そう言いながら静が小さな包みを珈琲カップの側に置いた。

「うわー、驚いたな、自分でも忘れていたよ。ありがとう、なんだか悪いなあ」

「いいえ、常連の方には差し上げることになっているんです。気に入って頂けるといいな。」

「幾つになりました」

柴田が新聞を広げながら尋ねた。

「四十四のゾロ目です」

「いや、お若い」

「そうですか？対象によりますよ」

「ハッハハ、そりゃまあそうだな」

柴田が豪快に笑い、つられて淳一も笑った。

店内には日曜の穏やかな雰囲気がい、静との幸せな時間が過ぎた
しばらくすると外は小降りになったのか、柴田が言った通り店内が混んできた。住宅地にある喫茶店としては広いほうだが、静の魅力で店は繁盛していた。

「サア、帰るとするか。いつまで油売っているって住人に叱られそうだ」
隣のマンションの管理人である柴田が立ち上がるのを見て、淳一も腰を上げた。ふと静を見ると少し目が潤んでいる様に思えた。今日の美しさとい何故か、何か
いつもと違う気がした。

淳一の勤めている病院はかなりの規模の大きな医療法人で、国から法人へと移行する前に建てられた建物は、未だ新しいというのに施設面でのトラブルが日常的に起きていた。

施設管理課の課長である淳一はその週も忙しく仕事に追われた。

妻の洋子もこの病院の手術室に看護助手として勤め、毎日疲れきって帰って来る。高校生の長女ひかるも中学生の長男和希も塾と部活でいつも忙しい。仕事も家庭もまるで戦場の様だと夫婦で話すことがある。

その週も終わり、待望の日曜日がやってきた。この日のために土曜日も出勤して今日に備えた。「静」に行くようになってからむしろ仕事にメリハリが出来た様に思える。

静のくれたプレゼントは驚くほど豪華な物だった。銀製のボールペンで金の星と月の模様がはめ込まれていた。

他の客も同じものなのか、もし淳一だけ特別な物だとしたら？

毎日同じことを何度も考えた。そしてその先を考えるのは怖かった。静の存在が次第に大きくなっていくのが分かった。

その日曜日、¹¹時に目の覚めた淳一は台所で子供たちの食べた夜食の後始末をしながら、洋子の大変さを考えた。

「すまん」

「いつもご苦勞様」

そう言いながら皆を起こさないように手伝いを済ませ、¹²時には外に出た。初夏のさわやかな朝、淳一は満たされていた。

「静」の開く八時まで、その日は本当に散歩をするつもりで歩き始めた。

一年前、散歩の途中ふと寄った喫茶店、ドアを開け、そして静に恋をした。もちろんあこがれだけに留ってはいるが。

罪のない恋じゃないか、週に一度顔を見るだけで幸せなのだから、と淳一は自分に言い聞かせている。

新鮮な朝の空気を胸いっぱい吸い込みながら、坂道を下り始めた。薔薇の季節とあって鮮やかな花色が目を引く。

坂道を右に折れ「静」を見るとまだ彼女は来てないらしく、窓のレースのカーテンが薄暗く、新聞が置かれたままだった。

不思議に思いながら店の前を通り過ぎ、隣のマンションを通り過ぎようとした時、そのマンションから柴田が顔色を変え、慌てた様子で出てきた。

「前田さん！」

「待っていたんですよ」

息を切らすように早口で喋り、

「ちよっとお話したいことがあります。中へ入ってくれませんか」

淳一は嫌とも言えず柴田の背中について中へと入っていった。

柴田は管理室へ淳一を通すとスチール製の椅子を勧め、缶コーヒーを側の机に置いた。

「こんな話、前田さんしか出来ません。」

柴田は真剣な表情で話し始めた。

「実は、静ちゃん、居なくなっただんです。前田さん？静ちゃん居なくなっただんですよ！」

柴田はほとんど泣きそうな顔をして叫ぶように言った。

「静ちゃんが居なくなっただってどういうことですか？まさか、そんな事ある分け無いでしょう？」

思わず大声になりそうなのを制して淳一は問い詰めるように言った。

「いいえ、本当なんです。静ちゃん居なくなっただんです。」

柴田は溜め息と一緒に深く沈んで行くように話し始めた。

「どこから話せばいいのか、昨日の夜も寝ずに考えましたよ。前田さんには迷惑かもしれませんがね。それに店が閉まっているって事はすぐに分かることですから、でもねえ誰かに聞いて欲しかったんです。心配なんですよ。」

「いや、迷惑なんて思いませんよ。静ちゃんのこと良くご存知だったんですか？居なくなっただって、どういう意味ですか？信じられない、そんなこと、なにかの間違いじゃないですか？」

淳一は理解出来ない展開に、努めて冷静でいようと努力した。

「前田さん、私はねえ、あの店が出来てから、二年半ぐらいになりますけどね、日に二回は行っていました。昼飯も晩飯も頼んでいましたから。静ちゃんは私の体のことを心配して、色んな料理を作ってくれましたね」

柴田の話によると彼女は一人で暮らしていること、弟が一人いること、岡山の出身という以外、詳しいことは話したがらなかったそうだ。

そして先週の火曜日には店が開かず、柴田と店を貸している大家の所へ静から手紙が届いたと言い、手紙を淳一に見せた。

手紙の中には委任状が添えられており、柴田に後の始末を頼んでいた。

必ず連絡するので心配しない様にと、そして迷惑を掛けること詫び、感謝の言葉が書き添えられていた。

「前田さん、静ちゃん、先週の日曜日迄待っていたんだと思いますよ。前田さんが来るのを待っていたんだと、そう思います。プレゼントを渡すためにね、静ちゃんのプレゼントはどんな物でした？」

「そんなあ、どうして僕にプレゼントを渡すために待たなきゃいけなかったのですか」

淳一は驚いた。

「僕の貰ったのは銀仕立てのボールペンでした。少し驚きましたが。こんな物貰って良かったのかなあ、とは思っていました。皆に配るには高すぎるような気がして。」

「他の人は普通のボールペンですよ、あなただけ特別だったんですね。やっぱり前田さんのことが好きだったんですよ。あの日、いつもとは少し違うなどは感じましたし。最後に気持ちを伝えたかったのでしょうか」

柴田は人の顔をじっと見ながら話を続けた。

「私は気が付いていました。彼女があなたのことを好きだっことをね、毎日通っていたのですからそのくらい分かりますよ。あなたを見る目が違っていましたから。切なかったと思います」

「でも、もしそうだとしてもですよ、そんなことでどうして居なくなるんですか、僕も静ちゃん好きです。でもその事と居なくなることは別の問題じゃあないですか。何か事情が別にあるんでしょう、柴田さん？」

「ええ、私はねえ年賀状に書いてあった住所にも行ってみました。マンションでしたが、かなりいいマンションです。管理人もやはりこちらと同じようで困っていましたがね、事情を話して部屋の中も見せてもらいました。店の中もそうですが、きちんと整理されていました。ですが、何か不自然なんです。タンスの中など整理してある割には、服の入れ方なんかいい加減でね。あの娘らしくないですよ。店の中も動かした物を元に戻したって感じがしますしね。まるで誰かが何か探し物をしたんじゃないかって、そんな感じがします。」

「どうして、なんで静ちゃんそうまでして居なくなっただらう。それに探し物っていったて、何を？」

「訳が分からない。どうしても信じられませんよ、そうでしょうか？」

「ショックですよ、そんなこと」

淳一はそれ以上もう聞きたくないと思った。静が汚されるような気持ちが出て嫌だった。

柴田は少し迷っているようだったが、決心した様子で再び話し始めた。

「前田さん、私は定年迄長いこと保険の営業をしていました。時代が良かったんでしょう、かなり良い成績でしたよ。私は仕事柄色んな、それこそ信じられない話も沢山見てきました。事実は小説より奇なりですよ。世間には信じられない話も決して珍しくないです。今回の事もそうだと思います。」

「前田さん、考えてみて下さい、そうまでしなければならぬ事情って、普通じゃあないでしょう？余程の事だとそう思いませんか？居なくなつたというより、逃げた。そう考えて良いと思います。前から妙に思っていたのですが、あのサクラベーカーリーというパン屋にしても、よく配達に来ていましたが、あの長い食パンそんなに必要だったとは思えんです。とりあえず何か知っているかもしれないと思い、電話帳で探してみたのですが、無いのですよ」

「でも、パン屋でしょう？関係ありますか？」

「そうですねえ、もしもですよ、あのパン屋、運び屋だと考えたらどうですか？

あのパンの中に何か入れて運んでいたとしたら？前田さん、そう考えると辻妻が合いませんか？」

「いくらなんでも飛躍し過ぎですよ、柴田さん。それじゃあ犯罪じゃあないですか、静ちゃんそんなこと出来ませんよ」

「ええ、犯罪ですよ。だから逃げたのでしょ。そうしなければならなかった。

二十五歳であれだけの店を出せたこととも関係あると思います」

淳一はイライラしながら答えた。

「もしそうだとしても、ですよ、いったい何を運ぶのと言うのです？あのパンの中に？」

「そうですねえ、たとえば、薬、麻薬の様な、それに偽造カードとか」

淳一は話の途中でいきなり立った。

「考えすぎでしょう！いくらなんでも、言ってる良い事と悪い事が在りますよ！頭がクラクラする！」

淳一は腹が立ってきた。

「前田さん、冷静に考えて下さい。じゃあ何故あのパン屋は存在しないのです？例えばです、スポンサーがいて、他に恋人が出来たとします。スポンサーを裏切り恋人と逃げたとして、じゃあ何故そんな恋人がいるのに、前田さんをあんなに好きになったのでしょうか？あなたは気がついていなかったようですが。ですが、事実でしょう？ それこそ不自然ですよ。そうじゃないですか？」

「そんなに好きだったと言われても、そんなこと分かりませんよ」
淳一は不機嫌に答えた。確かに淳一は静が好きだった。静も自分のことを好きだったと聞いて、嬉しい筈なのに今は随分と重荷に感じる。

「前田さん、私は本気でした。彼女のこと。恋人と娘、どちらも兼ね備えている存在なのです。今でも変わりません。つい前田さんに甘えてしまっってこんなこと喋ってしまいました。別に静ちゃんのこと助けて貰おうと思って言った訳じゃ無いのです。負担に思わないで下さい。迷惑なことと言って悪かったです」
そう言うと柴田は頭を下げた。

「いや、つい興奮してしまっってすいません。ひょっとしたら柴田さんの言うこと、本当かもしれないですね。」
落ち着いて考えれば、柴田の言うことに信憑性がある様に思える。

「柴田さん、これからどうします？」
「私なりに調べてみます。大家の所に運転免許証のコピーがありますので、まずそれを手がかりに始めようかと思っています。探偵社の方にも連絡済です」
柴田の思わぬ行動力に淳一は少し驚いた。それだけ静のことを本気に想っているのだろう。淳一は少し恥ずかしかった。

「分かりました。僕はあまりお役には立てませんが、来週また来てもいいですか？」
「もちろん、そうして頂けると心強い」

「まあ、屁の突っ張りにもなりませんかね」
淳一は自分を嘲笑う様に答えた。
行きと違って帰り道は憂鬱な気分だった。柴田を恨みたくなる。
何も知らなければ幸せな思い出ですべて終わっていたらどうだろう。
しかし淳一は家に帰ると努めて明るい声を出した。

「オーイ、帰ったよ」

「アッ、パパ、お帰りなさい」

「何だ、ひかる、部活じゃあないのか？」

「うん、ママがね、熱があるみたいなの。で部活休んじゃったの」

「えっ、熱があるって？オイオイ、鬼の攪乱かよ」

「バカ、ママだって熱ぐらい出しますよーだ。パパなんか何時もママのこと放ったらかしなんだから。ママが死んだらパパのせいだからねっ！」

ひかるは少し泣き声になっていた。淳一は心配になって二人の寝室の戸をそうつと開けた。洋子はこちらに背を向けて丸まって寝ていた。

「オイ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないみたい。体中痛いし、熱もあるし」

顔を近づけると、吐く息が熱い。

「何度だ？」

「三十八度四分」

「少し高いな」

「大丈夫、薬飲んだし、寝てれば治るわ」

「よし、病院に行こう」

「嫌よ、動きたくない」

「ひかる、バスタオル持って来い」

「うん」

ひかるが急いでタオルを持ってきた。

「ひかる、ママを手伝え、ママを起こして　　パパの背中におんぶさせろ」

「分かった」

洋子は余程しんどいのか何も言わず、淳一の背中に体を預けた。

「パパ、ママ大丈夫？」

ひかるが何度も聞いた。

「大丈夫だ。パパの病院に行くからね。」

淳一は洋子を背負い家を出た。珍しくひかるが、かいがいしく手伝う。洋子の体温で背中が熱い。

「朝起きた時に気がついてやればよかった」

「一体、自分は何をしているんだ」

淳一は洋子に心からすまないと思った。

「パパ、ありがとう」

洋子が小声で言った。淳一は何も答えられなかった。洋子は風邪と疲れから来る発熱ということで、三日程は仕事を休むことにした。幸い熱は二日で下がり淳一も安心した。そうすると今度は静のことが気になる。静よりしろ、柴田の方と言った方が正しいかもしれない。少しぐらい危険でも柴田は静のためなら危険に関わっていくだろう。

何故か静より柴田の方を心配している自分に淳一は驚いていた。その週の日曜日も気を使いながらも、朝早くから家を出た。あれから少しの間に季節は移り、梅雨のはしりの空は今にも降り出しそうな気配だ。花の色も紫陽花の淡い紫へと変わり、舗道に沿った家の軒下に梅雨の景色を見せている。

柴田を訪れると、柴田は喜んで淳一を迎えてくれた。

「いやー、昨日の夜、岡山から帰ったばかりです。調査員に同行させてもらいましたね。この時とばかり休みをもらいました。」

「岡山まで？それはご苦労様です。それで 何かありました？」
驚いて淳一は尋ねた。

「まあ、生い立ちみたいなのだけですが、今のところ」

「何処に居るのか迄は分かりません」

疲れているのだろう、柴田の顔色が悪い。

「柴田さん、大丈夫ですか？ 少し顔色が悪いですよ」

「私なら大丈夫です。静ちゃんがいなくなって、此処のところ、ろくなもの食ってませんからね。それででしょう」

「それより、静ちゃんのことですが」

柴田達の調査によると静は岡山の後楽園の近く、旭川の側で育ち両親は大きな日本料理の店を経営していたと言ったことだった。

「広々としたとてもきれいな所だね、店もまだありましたよ。もちろん経営者は変わっていました。彼女、幼い時は、幸せな環境の中で育ってますね」

淳一は持って来たサンドイッチと缶コーヒーを勧めながら、柴田の話に聞き入った。

「店の名は後楽と言う老舗で、繁盛していたらしいです。訪ねてみると、その時の板前が今も居ましてね、話を聞くことが出来ました」

「静ちゃんのお父さんも料理人だったそうですが、ぼんぼん育ちで、元々派手なと

ころがあったらしいです。先代が早く亡くなったことで、籠がゆるんでしまったのでしょう。その頃、常連客の中にやくざの幹部達がいて、大層派手に金を使っていたらしく、従業員にも気前良くチップをくれたり、他の客にも丁寧なので、店としても大切にしていたそうです。」

柴田は缶コーヒーを飲むと、一呼吸置いた。

静かな住宅街の穏やかさの中で、この狭い管理室だけがまるで切り取られたように、まったく違う空間に居る様な錯覚を淳一は覚えた。時折聞くラジオのドラマの様に。柴田の話は又続き出した。

「その板前は静ちゃんのお父さんのことを親父さんと呼んでいましたが、その内、親父さんはやくざとゴルフや夜の街にも出かけるようになって、結局、賭博にも手を出したそうです。女も与えられて、本人はいい気になっていたらと、その板前は吐いて捨てる様に言いましたがね。周りも随分注意したらしいのですが、その頃になると仕入れも品薄になって、評判も落ち、客足も当然遠のいてしまった。本人は賭博で負けた金を賭博で取り戻そうとして、深みにはまったらしいのですが、しょせん素人の悪あがきで、気が付いた時には、やくざに相当な借金が出来てしまっていた。その頃になるとやくざが、我が物顔で店の中をのし歩き、ばたりと客が来なくなつたそうです。バカラ賭博とか言つて、ひと晩に五百万や一千万位の負けは珍しくないそうで、最初は勝たしてもらつたのでしょうか。それがやつらのやり口とも知らずにね、まあ他人事だから言えることかもしれませんが」

「そうですか」

淳一は思い出していた。以前、見事な刺青の男が整形に入院した折、右翼の街宣車が病院に横付けして、大音量の騒音を流したことがあった。

その時は自分とは関係ない、その内止むだろうと傍観していたが、恐ろしい世界だと思ふ。

一歩間違えば、淳一もそんな世界に入っていたかもしれない。

自分は絶対にそうならないと言えるだろうか、巧妙に張られた罫を見抜くことが出来るだろうか。

たとえ戦場の様な毎日であっても、平凡な生活のありがたさが身に沁みだした。

柴田は小さな冷蔵庫からドリンク剤を取り出し一気に飲み干した。

「ふう、この季節になるとどうも体がだるくてなりません。歳ですなあ。だから静

ちゃん私を頼れなかったのでしょうか、頼ってくれていたらと思うのですが」

「そうじゃあないでしょう。ただ柴田さんに迷惑をかけたくなかった、それだけだと思いますよ。自分を責めてどうするんですか」

「きつと、彼女誰にも迷惑をかけたくなかったのでしょうか。もし危ないことに関係していたとしたら、余計そうするでしょう?」

柴田は黙って頷いた。

「何があったのでしょうか?まるで澄んだ水の様な娘でした。気丈なんでしょうねえ」柴田が深い溜息をもらした。その時静かな室内にカチツと言う金属音が外から聞こえてきた。

二人は一瞬視線をその方に向けたが再び顔を向け合った。

「柴田さん、今度うちに来ませんか?うるさい所ですが気分転換になりますよ」
「そりゃ楽しそうだな。ぜひそうさせてもらいます」

やっと笑った柴田を見て淳一は帰ることにした。外に出ると雨を呼ぶ湿った風が火照体に心地良かった。

そうして梅雨も明けたころ

「パパー、お散歩?」

「ああ、ちょっと柴田さんに会って来るよ」

朝早くからの強い日差しのせいか、洋子も朝が早い。

「パパに合わせて夏休み取るから、帰ったら相談しましょう。子供達も長野のおじいちゃんの処に行きたがっているし」

「今年は少し長野に長く居ようか、おふくろも喜ぶし」

「嬉しい。ちょっとした避暑よね、皆羨ましがるわよ、きつと。温泉にも行きたいな、たっぷり森林浴も出来るし。うーんと楽しみ!毎日ステンレスとガラスの中にいると干からびてしまいそうなもの」

洋子を見ていると、柴田と静のことが現実とは思えなくなってしまう。

柴田の言っていること自体余りにも現実離れしている様にも思える。

いつものように坂を下り、主の居ない店を見ない様にして通り過ぎた。柴田は今朝も待っていたのだろう。ちょうどマンション入り口の植え込みに水を撒いているところだった。淳一を見ると笑顔になった。

それから管理室に入ると何時通りイスと缶コーヒーを勧め、そして淳一の間を見つめて話し始めた。

「静ちゃん、東京に出てきてからも相当頑張っていましたよ。いつも二つの仕事をしながら、夢を目指していたようです。女優になる夢をね。

あの世界、美人なんて掃いて捨てる程、いますでしょう、運が大きく物を言う世界らしいです。

静ちゃんはまだその運に出会えてなかったのでしょうか。

詳しくは知りませんが、誘惑の多い世界で酷い目にも遭っていたようです。

そんな中へ弟の浩哉君が転がり込んで来た。これがもうどうしようもないような弟で、姉さんには随分と迷惑をかけていたようです。職場の人に時々こぼしていたと言います。彼女自身少しでも給料の良い所へと職を転々としていますがね」

柴田は何を知り得たのだろうか。

コーヒーを飲みながら、時折探す様な視線を泳がせる。

「ねえ柴田さん、もう十分じゃあないですか？素人じゃこれが限界ですよ。待ってみませんか？

静ちゃん、きつと連絡してきます」

柴田が頷いた

信じていなければやりきれないだろう。淳一はそう思った。

それから淳一の周りでは同じ様な日々が繰り返され、そんなある日の明け方、奇妙な夢を見た。気がかりだったので洋子に話してみた。

「おい、洋子、今朝桜の夢を見たよ。綺麗な夢だったけどなんか淋しい夢だったよなあ」

「それって夢見が悪いわ。桜の夢は大切な人との別れを意味するって聞いたことがあるの、誰か出てきた？」

「いや、別に」

「なら良いけど、今日お母さん達に電話してみる」

洋子は顔を曇らせ考え込んだ。

「やっぱり、側にいなければ心配だわ」

淳一は急に食欲が無くなった。

無理に牛乳でトーストを飲み込むと新聞を持ってトイレに入った。

社会欄を丁寧に見たが静に關したような記事は出ていなかった。夢の中に静がいたのだ。満開の桜に渦を巻いて散る花びら、そしてその中にまったく表情の無い静が立っていた。夢だと言うのにそれはあまりにも鮮やかで美しく、そして淋しく、不思議で、強く心に残る夢だった。

それからも淳一は休みには柴田の所へ寄ることが多かった。最近柴田は静のことはあまり話さなくなったただいつの間にか、二人の間には親しい感情が行き来していた。八月に入り、盆も明け、夏休み最後の日淳一は長野の土産を手に柴田の所へ歩いて行った。蝉時雨の賑やかな昼下がり、柴田の管理するマンションの前には打ち水がしてあり、アスファルトに涼を呼んでいた。エントランスのガラスドアが開くと、柴田が管理室の前に笑顔を見せて立っていた。ガラス越しに淳一が見えたのだろう。

「柴田さん、帰りました」

淳一がニコニコして土産を見せると

「やあ、お帰りなさい、待ってました。虫の知らせかな」

「なにが？」

怪訝な顔で尋ねる淳一に柴田が、管理室のドアを開けた。

目の前に静が立っていた。あまりの事にしばらくの間三人とも言葉が無かった。

ようやく静が

「帰りました。色々心配をおかけしました。柴田さんからお話を聞いて本当に申し訳なく思ってます。前田さん、ごめんなさい」

長い髪をばっさりと切り、化粧っ気の無い顔の静が深く頭を下げた。

「静ちゃん、お帰り。二人とも待っていたよ」

淳一はそれ以上何も聞かなかつた。静がそこにいる。それで十分だった。

「前田さん、あのう私」

「静ちゃん、もういいよ、何も言わなくて。静ちゃんが元気にいる。それで良いんだ」柴田が二人に椅子を勧め、代わりに話し出した。

「静ちゃん教会に保護されていたそうです前田さん、静ちゃん犯罪組織のメンバーだったそうです」

ショッキンクな言葉にも淳一は驚かなかつた

「なかば強引に、浩哉君を人質に組織の中に引き込んだのです。浩哉君自身麻薬に
関係していたのですが、自身もかなりの中毒になっていたんですね。絶えず裏切り
は死だと言われ、監視も付いていたそうです。何時も逃げることを考えていたそう
ですが、浩哉君のことがあるので出来なかった。そんな時あのパンの配達の方が静
ちゃんにメモを渡したのです。メモには浩哉君がトラブルで殺されたと書かれてい
たそうです」

静が視線を伏せている。淳一はそんな静に胸が痛んだ。

「静ちゃんがあることに気付いたのが分かれば監視はもっと厳しくなる。逃げる可
能性が大きい訳ですから。それで静ちゃん気が付かない振りをしてながらあの日を
待ったそうです。その四日間は生きた心地がしなかったそうですが、前田さんにど
うしても、あのプレゼントを渡したかった。その思いだけで耐えたんですね。ど
うですか、私のいった通りでしょう?」

「僕にはそんな資格はありませんよ」

淳一は俯いて答えた。

「いいえ、私前田さんに会えることが支えでした。柴田さんは別として。だから最
後にもう一度だけ会いたかったのです。プレゼントも渡したかったし。ただ憶えて
いて欲しかったんです。独りよがりの我儘ですけれど」

「静ちゃん、ありがとう」

それ以上の言葉が出てこない。

「それでね、静ちゃん教会へ逃げ込んで神父さんにすべてを話し、神父さんに付き
添われて、警察へ行ったそうです。自分も犯罪者だと思い警察に行くのもとても恐
かったらしいのですが、神父さんにすべてを任せなさいと言われ、勇気を出して警
察へ行ったそうです」

「あのパンの配達人が神父に連絡してたそうで、知ってたそうです。クリスチャン
の家庭に育ったらしいとかで。もちろん子供の時の話でしょうが」

「そうだったんですか」

「店から逃げるための自転車も彼、青井って言うのですがね、店の近くに置いていた
そうです。そういったことはメモに書いて渡してたんですね」

「その青井という男はどうなったんですか」

「神父から静ちゃんの無事を確認した後、警察に電話したそうです」

柴田はいつもの様に缶コーヒーで喉を潤すと、再び話し始めた。

「青井は静ちゃんを逮捕しないと言う交換条件で、すべてを話したそうです」

「青井は無事なんですか」

淳一はあの雨の日ちらりと見た彼の横顔を思い出しながら聞き入ってた。

「まだ若い男だったな、静ちゃんのことを好きだったんだろうな」

淳一は彼の純情を思った。

「青井はそのまま組織に残ってました。危険だったと思うのですが、どうやら無事のように胸を撫で下ろしてます」

柴田は実際に胸を撫で下ろした。

「その後、警察はすぐに動き内偵の調査が続き、今日一斉逮捕だそうです。一網打尽だと良いのですが、もちろん青井も逮捕されますがね」

「そうですか、青井のことは残念ですが」

「覚悟の上でしょうねえ」

静の握り締めた指先が白い。

瞳に溜まった涙が流れ落ちた。

いたたまれない思いを払うように淳一が言った。

「だけど良かった静ちゃんが無事で。柴田さん、これで安心ですね」

「はい」

静からすべてを聞き淳一に話した柴田の表情は穏やかになっていた。淳一は静に聞いた。

「それでこれからどうするの」

「教会へ残ります」

「教会へ？」

「はい、神父様の働きを見ている内に、自分にも出来る事が沢山あると思えたの、それに教会にいるとなんだか安らかな気持ちになれるし、恵まれない子供達の為に、私の出来る事してみたいの」

「よく考えたんだね？」

「はい」

きっぱりと静が答えた。黒目勝ちの瞳に決心が浮かんでいる。そして変わらずに美しい。

「なんだかもったいない気もするけれど、きっとそれで良んだよね」

二人が顔を見合わせて微笑んだ。

「それでね、前田さん、静ちゃん来週の水曜日、ニューヨークへオリバー神父と共に発ちます」

それから私も静ちゃんの後を追って行きます」

「ニューヨークへ？柴田さんも？」

「はい、雑用ならまだ十分役に立てます。お金も私を持っているより、何かの役に立てた方が値打ちがあるって物ですよ」

「柴田さんが居なくなると淋しいです。せつかく仲良くなれたのに」

「前田さん、会いに来て下さい」

「ええ、そうですね。今度はそれを楽しみにします」

こうして柴田と会えなくなるのは淋しいと思うのだが、柴田と静の為には喜んで二人を送り出す事が、淳一に出来る最大の事だった。

「柴田さんが発つ時、空港まで送らせて下さい」

「ありがとうございます。そうさせて頂きます」

「今夜は柴田さんと飲み会だな」

立ち上がった淳一に静が近寄ると、そうっと淳一の胸に顔をうずめた。静の香りが淳一を包み、淳一は思わず零れそうになる涙を、止めた。

そして静は離れると、柴田の方を向き言った。

「想いが叶ったわ」

淳一はこんな切なさがあることを知った。

「元気で！」

精一杯の言葉で管理室を後にした。前を若い男がエントランスから出て行くところだった。出口を左に曲がる時見えた横顔がにやりと笑っていた。

それから一年後のある日、夜も更けた頃に電話が鳴った眠っている洋子を起こさないように急いで出ると

「前田淳一さんですか」

少し片言の日本語が聞こえた

「はい」

「こちらはオリバーと言います、実は悲しいお知らせをしなければなりません」
一呼吸の間があり、震える声で言った。

「静さんと柴田さんが亡くなりました。酷いことですが二人とも殺されてしまいました」

淳一は驚愕した。オリバー神父の話によると、昨日の朝教会の外でいきなりピストルで撃たれたと言う。側にいた柴田は静を庇い撃たれ、静はそんな柴田の側を離れず、毅然と頭を上げ自ら撃たれたと言う。淳一はベランダに出ると声を殺して泣いた。組織は諦めていなかった。あの時の物音そして淳一の前を歩いていたあの男、柴田は見張られていたのだ。何時か静が連絡をして来ることを知られていたのだ。そして静も、もしかしたら知っていたのかもしれない。いつか奴らが来るかもしれないことを。

淳一は手摺りにもたれると、「静」でよく聞いた曲を口ずさんだ。曲名を尋ねると、
「クレオパトラの夢と言うの。壮大な曲名でしょう？」

静はあの曲にどんな夢を重ねていたのだろう。空を見上げると都会の蒼い夜空に猫の目をした月が地上を見下ろしていた。一粒の涙が月を捕らえ淳一の頬を落ちた。